

倫理問いかける場

文人の
武蔵野

「モラリティーなしに人間は存在できません。僕はモラリティーというのは同時存在のことじゃないかと思うんです」

村上春樹が1982年に発表した短編小説「納屋を焼く」からの引用で、アルジェリア帰りの謎の男が小説家の「僕」を前にして、「モラリティー」と「同時存在」について語り

村上春樹 ⑨

かけている場面です。

ふたりの男は、大麻を喫みながら、東京とアルジェリアの世界線が同時に存在する感覚の手触りを共有できる空間を立ち上げていきます。

そこは、謎の男を記号的に表象する乃木坂や品川ナンパのスポーツカーとは明らかにイメージを異にする、「納屋」のある（武蔵野らしき）郊外でした。

謎の男は、罪に問われることなく非合法的な経験を積んできた零闘気を漂わせ、いかにも裕福であり都会的で紳士

「納屋を焼く」などを収録した村上春樹の短編集



的に見えますが、日本の世間的道徳の力が届くところで生活しているようには見えません。ここでのアルジェリアは、日本標準の違法行為が正当化されて合法とみなされ得る場であり、そのことが女性の失踪と関係しているかのよう描かれています。

既成の道徳やモラル（倫理）を超越したところで生きていくような人物に「モラリテ

イー」の必要性を語らせているところに意味があります。

村上の最新作の「武蔵境のありくい」では、謎の男が

りくい、アルジェリアがブラジルに置き換えられていると考えることができます。実際、「どうしてあなたは私に、武蔵境に引越すように勧めたのですか？」と尋ねる夏帆に、誠実に向き合いながらも

謎かけのような応答をするありきいが「同時存在」を鍵言葉にして説明しています。ありきいの同時存在は、未来と現在と過去を対象にしています。

「武蔵境のありくい」の同時存在は、ブラジルにおけるありきいの世界と、大東京と武蔵野の関係の中で描かれる

人間世界とが、相互に暗示しあいながら混じり合う「境」を構成する感覚の概念でした。

人間世界では悪とされる殺戮を、善意の第三者がブラジルの「ジャングルの論理」に基づき正しく行使した場合、どのように責められどのようなにゆるされるのか（モラリティー）を問いかける場として武蔵野がありました。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）
（敬称略）

*

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

